

冲

5
2020

第100期 [100]



春

窮

能村 研三

自粛の中の芸術文化

新型コロナウイルスの影響により自粛ムードでイベント中止が相次ぐ中、自宅などにいながらにしている方が広がっている。

大相撲の春場所も無観客の土俵で、最初は声援もない静まりかえった館内の音に違和感を感じていたが、千秋楽の頃になると、これも神事の一つなのだと思い新たに冷静な見方で相撲を楽しむことが出来た。

美術を鑑賞しようと思うと「オンライン美術館」というのがあり、展示される作品をじっくりと専門学芸員による懇切丁寧な解説付きで見ることが出来た。

観客のいないホールに響き渡る、オーケストラの演奏も動画の配信で見ることが出来た。中でも琵琶湖ホールから配信されたオペラ、ワーグナーの大作「ニーベルングの指輪」最終章「神々の黄昏」は、六時間の熱演が続いた。静かなカーテンコールではあったが、だれ一人手を抜くことはなくソリストや合唱団、最後

春窮の列に加はりマスク買ふ

筆庄の弔辞原稿春ならひ

悼・菅谷たけしさん

朧夜をひと匝りして帰り来よ

魂遊べ東風檀林の杉叢に

料哨や兄ちゃんと呼ぶたけし亡し

病食はあの手この手のはうれん草

快気後は早寝癖つき二月果つ

無観客の球場響み陽炎へり

逃水のいざなふ自動運転車

土筆摘む屈み疲れのひと所

に舞台上上がったオーケストラのメンバーらは、それでも笑顔で何度もカメラに向かって挨拶した。

琵琶湖ホールはかつて文化会館の館長時代に視察に行ったことがあるが、国内ではめずらしい四面舞台を備えたオペラには最適な劇場で普段であれば二千席たらずのホールだが、この日は全国から36万のアクセスがあったという。これは日本のオペラ史上に記録的な出来事だそう

だ。私たち俳人も外出の制限をされ、普段の俳句会も人が集まっただけが出来ず、通信による句会を例えごとに行うこととした。お世話いただいた方々のご苦勞には頭が下がるが、予測をはるかに越える人たちが参加してくれたことには驚いた。

コロナウイルスの感染を防ぐには、もうしばらくの辛抱が必要であるようだが、芸術文化を志向する人たちはこんな非常時にもいろいろな工夫があつてすばらしいものだ。

能村 研三

明日葉

森岡 正作

掌の鼓動

をちこちに海女を放ちて船帰る
鳶の輪の中を潜りて海女の笛
まづ梅と蔵を褒めたる古物商
水温む吟遊詩人のやうに鯉
白木蓮の盛りを見せて出棺す
鳥雲や出来ぬ逆立ち逆上がり
島を出る子に明日葉の戦ぎをり

世の中のコロナウイルス騒ぎで、今年は春という季節が高揚感もなく過ぎて行こうとしている。雪国で育った私にとって、春というのは雪解けに伴う山川草木の大きな変化であり、好きな釣りのシーズンの幕開けであった。登四郎先生には春鮪を詠んだ四、五句はあるが、鮎以外の川魚の句はないと思っていた。それが何と「掌の鼓動 たしかに雪代山女なり」という句があった。まさに我が意を得たりである。雪解けで少し増水した薄濁りの溪流で、まず釣れるのが山女であった。サクラマスの稚魚とも言われる陸封魚で、その二十センチ位の大きさが、手のひらでパクパクと息する姿は美しく、釣りキチ冥利であった。また、白身で非常に美味しい山女であるが、鮎と違って市場で見かけることは無い。道楽者にとって貴重な魚なのである。



深庇見せて伽藍の梅明かり 宮岡 弘
伽藍配置のある寺というと、京都や奈良、鎌倉にある大きな寺院を思い浮かべる。本堂、金堂、五重塔やそれを取り巻く回廊などその配置は宗派によっても違う。本堂の屋根も深庇で、これも日本建築の大きな特徴の一つで、雨の多い日本の気候の中で建物を守る為なのか、美しさと情緒が巧みに表現されている。寺の庭には梅が咲き誇り、その花明りが伽藍に明るく射しこんでいた。明るさと内部の暗さとの対比がよい。

流水の意志ある如く沖へ出づ 杉原かほる
北の果てで氷結した海水が溶けだし、割れて海面を漂流する。この氷塊を流水という。一月下旬頃から三月下旬に北海道のオホーツク海沿岸にみられ、四月初旬には沖に退いてゆく。一夜にして去ることもあるそうだ。自然現象とはいえその動きは意思をもって動いているようだ。

啓蟄やこの世ざわざわして来たる 根本 世津
収束の見通しのたたないコロナウイルスで世の中がざわざわして落ち着かない。これまでに誰もが経験したことのないことで不安がつる毎日である。啓蟄を過ぎて、地中に冬眠していた虫たちが地上に姿を現す時期。世の中とは別に自然は確実に時間を刻んでいる。

陽炎や浮いて見えたる 一両車 千葉 禮子
陽炎は地面から立ちのぼる蒸気で空気が乱れ、風景やものが揺らめいて見える現象。まして人里離れた郊外を走る一両車がゆらゆらと走ってくる景色は車両全体が浮き上がって見えるようだ。作者がお住まいになる青森では春になるとこんな景色が見えるのかも知れない。

海人老ゆるもこの一閃の若布刈鎌 中村 重幸
春は若布刈りの最盛期で、海に舟を出して、長い竿の先に付けた鎌の先で根元から切り取ってすくいあげる。地方によっては海人が海底に潜って採る。熟練の海人であればいかに年をとつてもその技は衰えることはない。若布を刈り取る鎌の一閃の手捌きでそれがわかった。

能村登四郎の軌跡〔21〕

能村 研三

甚平を着て今にして見ゆるもの

『長嘯』平3

部屋から庭を眺められる縁側の藤椅子に座っていた時、登四郎はよく甚平姿であった。昭和四十四年に「喜雨亭先生甚平の膝若くして」という句があるが、秋櫻子とは二十歳の差があるので、二十年を経て自分も甚平が似合うようになったと思えたのだろう。傘寿を迎えたが健康にも恵まれ、たてつづけに俳句総合誌に大作を発表するなどますます作句意欲が盛んになった頃で、庶民的な甚平は仕事や諸事から解放され家での仕事が多くなった登四郎には格好なものであった。この齢になつてはじめて真実が見えてきたという述懐。

睦み合ふごとし雨中の松さくら

『易水』平4

「沖」の愛知支部の柴田雪路さんらが中心になって、徳川家の菩提寺である岡崎市の大樹寺に句碑として刻まれた句である。雨中の桜と松は究極の美学といえる。この句の初案となる句がある。昭和四十五年の作で『民話』に収載された「さくらと松濡れぬる時は睦むごと」という句である。これは自己模倣ではない。登四郎は一度作った句を後に推敲を重ね自分自身で納得するまで作り直す作業を惜しまない。句碑開眼の日は平成四年四月四日で登四郎は「佳き日てふ四の字づくしのさくら句碑」という句を作っている。

長子次子稚くて逝けり浮いて来い

『易水』平4

平成四年、登四郎は八十一歳であったが、旅の多い年であった。その中の一つがBSの俳句吟行会で下関を訪ねる旅であった。飴山實、茨木和生両氏に加えて「沖」からは中原道夫や坂巻純子や私が出演した。当日の席題は長州にちなんで「長」の一字詠み込みで作ったのがこの句で、発表後評判となった句である。当日は壇ノ浦周辺を散策したので、安徳天皇の入水されたことへの思いが自らの二人の亡き子への思いに重なったのだろうか。海底から幼帝が浮かび上がってこられるイメージから「浮いて来い」の季語へとつながった。

戦捷の明治に生れ敗戦日

『易水』平4

登四郎は明治四十四年の生まれ。大正に近い頃だが、明治人の気概と自負を持っていた。欧米の列強に負けない国づくりをめざした明治の人にとっては、敗戦は大きな衝撃であった。昭和二十年六月の応召、横須賀海兵団に入隊、この日を迎えたのは伊賀上野の航空基地であった。この時、登四郎は命があつてあよかったと思ふ気持と、同じ重さで戦争に負けた無念さが心の中にひろがったという。この句の前に「厠にて国敗れたる日とおもふ」という句を作っている。登四郎にとって生きているかぎり忘れてはならない日であった。



蒼茫集



善意 藤原照子

巡回神父 荒井千佐代

消しがたき夢の余韻や春あけぼの
健脚へゆづり越されて春の山
初音かな整体台の身を解かれ
* 穴一つひとつの孤独大千瀉
山焼や噴火の跡の洞を秘め
善意いくつ賜りし日や春の虹

雛の間の雛が人待つ静けさよ
白魚の黒きはらわた動きをり
復活祭巡回神父に海荒れて
昏きより猫の出で来し種物屋
柳絮飛ぶ一戸に一艘持つ暮らし
* 昨夜よんべより灘は荒波雛納む

ラスト・シーン 千田百里

風の名 栗原公子

春暁の酔余に水や大石忌
鷹鳩と化し釣人の野球帽
春愁やチョコを銀紙越しに割り
書肆のあるじの黒縁眼鏡菜の花忌
春意おのづと短冊のかすれ文字
* 陽炎へるラスト・シーンのやうに人

春来たる付箋二色を貼り分けて
* 風の名のあまたありけり抱卵期
貝寄風や光となりて飛ぶ鷗
ほらあれが雉の鳴き声それつきり
寡黙なるひと日なりけり蜷汁
たけし悼賞谷様亡しこんなにも春明るきに

春愁 宮内とし子

* 春愁といふ引く波の残す泡
花種を蒔けり残りは風のまま
雲水の褥一畳鐘冴ゆる
こぶし咲く黒漆喰の蔵の町
啓蟄や人の名と顔覚束な
花冷や絞り切つたる白布巾

道祖神 能美昌二郎

畦焼くや確と抱き合ふ道祖神
* 己が身の研がるる如く月二月
下萌の畦くつきりと山を分つ
如月の鏡の中の無精髭
拳玉のもしもし亀や春来たる
梅愛づる静かな距離のありにけり

大地の鼓動 佐久間由子

牡蠣鍋や岬に張り出す低気圧
銀嶺の風擱まんと金纏梅

残像 辻美奈子

* 初蝶にターコイズブルーの残像
海亀の鱗にあるタグ水温む
すみれ咲き初むクリップの大小
館山の野が露味噌にせよと言ふ
春疾風しかめつ面の眩しげに
神事まさしく三月場所の無観客

猪肉 広渡敬雄

蘆枯れて一点に日の没しけり
* ダイヤモンドダスト白樺林昏し
猪肉をどすんと置いて帰りけり
立春や英彦山がらがら土鈴鳴らさうか
猟犬の墓まあたらし猫柳
リヤカーの轍ふたたび凍てにけり

潮鳴集



生家跡

平松うさぎ

鳥引くや均して広き生家跡

*春めきて啄む鶏の目に力
鳶の輪を突き抜け海女の笛高し
利休忌や椿割りたる蕊あかり
物憂げなカピバラの顔春の夕

亀嶋く

栗坪和子

*海鳴の夜なり亀の鳴く夜なり
半部をあげ高空へ鬼やらふ
水草生ふ佃にありし骨董屋
ランナーの一人づつ来る春渚
亀鳴くや加賀の棒茶を濃くいれて

縄たはし

諸岡和子

*榛の木に春の水来る雑魚のくる
霾や荒縄で結ふ鉢積まれ
きざはしとふ斜めなるもの鳥帰る
父祖からの種桶洗ふ縄たはし
そのなかの賞谷たけしさんを悼む一羽さきがけ鳥帰る

電子サイン

本池美佐子

神楽笑みたけし様
微笑みの慈父そのままに石鹼玉
*ありなしの風を諾ひ糸ざくら
宅配便の電子サインや花ぐもり
亀鳴くや黙の膨らむエレベーター
蝌蚪の尾のぴちぴち生きてゐる証

沖作品



能村研三選

*深底見せて伽藍の梅明かり

神奈川

宮岡 弘

梅満つや加賀宝生の脈々と
蔀みな跳ね上ぐ御堂うららけし
東風の月山襲あらはに比良比叡
たつぷりと富士の雪解け甲斐駿河
良く磨くめがねのレンズ日向ぼこ
繋ぎ目の多き埴輪や日脚伸ぶ
磯焚火恋の話の始まりぬ
*流水の意志ある如く沖へ出づ
力瘤の鬨ぎ合ふ腕山笑ふ
*啓蟄やこの世ざわさわして来たる
春眠の母に呼ばれてゐるやうな
鳴き交はす春禽の声艶めけり
一人つ子のひとり遊びや桃の花
父病みて子に託されし春田打

市川市

杉原かほる

福島

根本 世津

残雪の一段映ゆる津軽富士

青森

千葉 禮子

川岸に垂れたる枝や風光る
春日影こだはることは何もなし
蛇行せし川の流れや春灯
*陽炎や浮いて見えたる一両車
白魚の影なきバケツ水さわぐ
春めくやみなやはらかきものの影
活断層万年秘めて草萌ゆる
*海人老ゆるもこの一閃の若布刈鎌
立春の光をたたくコンパクト
ウインドに小粋に撥ねし春ショール
待ちぼうけ古書の匂の街二月
ゆつたりと着たる裾濃の春袴
捨て舟の影を出でざる葦の角
*いち早く末黒の星の出揃ひぬ

千葉

中村 重幸

福岡

小倉 征子